

田植えから活着期の水管理

■ 除草剤の散布は適宜に、水管理は適切に ■

1. 除草剤散布 □ 圃場条件を確認しながら散布 □

ノビエ等の雑草は代かき完了後から活動し、代かき～田植えの期間も高温で推移するため、成長も早くなっています。

近年は、田植えと同時に散布できる（移植時登録のある）除草剤もありますので、遅れずに除草剤散布を行うようにしましょう。

条間に生えたヒエ



- 除草剤散布時は、田面の高いところが隠れるくらいまでたっぷり水を張る。
- 除草剤散布後5日～7日程度は、湛水状態を保持する。（落水・かけ流しはしない）
- 効果が高いからといって同一薬剤（同系統）の薬剤を連用しない。（抵抗性雑草対策）

2. 水管理 □ 活着後は浅水管理 □



活着したイネ

田植え直後、苗が活着するまでは、苗の葉先が少し見えるくらいの深水（3～4cm）を維持し、苗を保護しましょう。

新しい葉が出始めたら、活着し始めているので、2～3cm程度の浅水管理で水温、地温の上昇を図り、分けつの発生を促進し、莖数確保に努めましょう。

田植え後、長期間深水で管理していたり、移植後が高温のときなどは、土中の有機物の分解が早まりワキ（ガス）が発生することが多くなります。ワキは、根を傷める（根の色は赤黒色～黒色になる）ため、そのときは、時々落水し、田干し（一時干し）をするなどして根の活力を向上させましょう。

ワキが発生した圃場



3. 田干し □ 葉色が出ない圃場は、好天日に落水して軽く田干し □

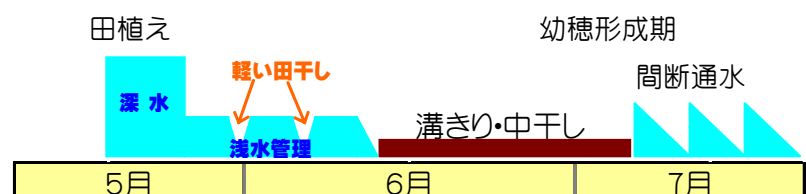
この時期、基肥をしっかり入れたはずなのに、葉の色が薄い、葉先が黄色くなっているなどの要因として、土の中にガスが溜まって根の伸長が阻害されていることが考えられます。葉色が淡いからといって、むやみに追肥をせず、軽く田干し（1～2日間落水）を実施しましょう。地表から水が無くなるとガスが抜け、根には酸素が補給されて、根は地中深く伸びるようになります。

活着後の深水管理は、田水温の上昇が遅く、分けつが遅れ、ひよろひよろした軟弱徒長を招きます。コシヒカリは6月中旬まで浅水管理とし、水の入替えや軽い田干しで根に酸素を与えましょう。



軟弱徒長の稲

■ 水管理の目安



藻やワキが発生した場合は、水の入替えや軽い田干しを行いましょー！

適正な水管理で初期生育の促進、早期に強い分けつの確保を！

中干しを徹底 健全な稲体を

■ 目標茎数の7~8割、7.5~8葉期を目安に ■

収穫直前までの通水に備え、溝張り・中干しをしっかりと行いましょう！

中干し開始の目安は目標茎数の7~8割！ 移植後25日~30日頃

1. 溝張り □ 中干し前に必ず実施 □

中干しを効果的に行うためには、溝の設置は不可欠です。

溝張りは中干し以降の入排水管理を速やかに行うためにも有効です。そこで、遅くとも中干し前には溝張りを行い、圃場内の円滑な排水に努めましょう。具体的には目標茎数の7~8割（コシヒカリ：移植茎数16本/株、直播茎数100本/m）が確保された時点から落水を開始し、土の表面が固まってきたら2.5m~3m（8条~10条）間隔で溝張りを行いましょう。



※ 胴割れ粒を防ぐためには、収穫期に落水を急がないことが重要となり、登熟期間にしっかりと水を溜めても、刈取作業に支障が無いようにするには、秋まで残るような溝張りを行い、中干しを十分に行う必要があります。

2. 中干し □ 田植え後25日~30日が開始目安 □



中干しは、無効（無駄な）分げつの発生（茎数過多）や根腐れを抑制し、稲の直下方向の根の伸張を促進します。【過剰分げつを抑え、根を強く張らせることが目的】

さらに、圃場の土を固めることで、登熟後半まで通水しても収穫作業を円滑に行えるようにします。

目標とする茎数が確保されて、中干し時期が来ているにもかかわらず、中干し開始が遅い圃場が散見されます。中干しが不十分になると、茎数・籾数過剰となり、倒伏や白未熟粒の発生に繋がります。

又、根張りが劣り、地面が柔らかいまま登熟期となった上、収穫作業のために早期落水し、登熟後半に稲体の活力低下を招くこととなります。



中干しは田面に小さな亀裂（ヒビ）が入り、軽く足跡がつく程度までしっかり干し上げましょう。

稲が大柄になりやすい平坦地では早め・強めの中干しを心がけましょう。

極端に強すぎる（大きなヒビが入る）中干しは漏水が多くなるなど、今後の水管理に悪影響を与えるので控えてください。



3. 病害対策 □ 箱施薬を散布しなかった方へ □



この時期、高温多湿になることや、稲体が若いためいもち病にかかりやすくなっています。

苗箱施用いもち予防薬（嵐プリンス粒剤）を使用していない場合は、6月10日頃までに予防剤（イモチエース粒剤）を散布してください。

また、補植用苗（取置苗）にはいもち病が発生しやすく、葉いもちの伝染源となります。土中に埋めるなどして早急に圃場から除去しましょう。